



1 □リチャード・ウィルソン イギリス 1953-
Richard Wilson UK 1953-
共同溝入口、排気口
entrance to the utility tunnel, vent

この階段の作品の下には地下の巨大な機械室に降りて行く本当の階段があります。なおかつこれはその地下の機械室の排気口にもなっています。階段はそのなかに隠された姿も示しているのです。彫刻は典型的な英国式階段に似せてアルミニウムの鑄造でつくられています。ウィルソンは奇想天外な方法によって現実の空間を容客させる作家です。



2 □新宮晋 日本 1937-
Susumu Shingu Japan 1937-
「訪問者」 「Visitor」
換気口 vent

新宮晋は動く彫刻をつくる作家です。地球の呼吸ともいえる風や、血液ともいえる水という、自然のなかで形になりにくいものを、金属の工作物によって捉えようとしてきました。それは手品のような童話の世界です。風や水という透明なものの存在を知らせるためにこれらの仕掛けは微妙で精巧なものでなくてはなりません。そこに作家の力量があるのです。



3 □チャールズ・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-
「水瓶」 「Water Quiver」
散水栓カバー water faucet cover

ウォーゼンはチューブを使った有機的な形をよく使います。今回つくった4つの散水栓のためのカバーはすべて植栽のなかにあります。植栽は街が存在する以前にあった自然の緑を思い起こさせます。昔、人びとは水を井戸から汲み上げ、家まで器で運びました。その器のようなもので散水栓のカバーをつくらうと考えたのです。この器は、水を考える際に重要な、象徴的な意味をもっています。



4 □岡崎乾二郎 日本 1955-
Kenjiro Okazaki Japan 1955-
換気口 vent

この作品がつくられていた頃、それは造船所に横たわる船の竜骨のようであり、シロナガス鯨のあばら骨のようでした。6個の排気口をおおいう構造を、岡崎はコンピューターを使って美術作品に仕上げたのです。線にはいろいろな表情がありますが、この線には日本と西洋の文化的な落差を超えた普遍的な美術言語で語ろうと努力している日本作家の自己表現が見えるのです。



5 □伊藤誠 日本 1955-
Makoto Ito Japan 1955-
換気口 vent

伊藤誠がつくる作品はある面から見ると平面的ですが他の側から見るとまったく違って見えるという空間です。今回のデパートの脇にあるベデストリアンデッキ下のドライエリアは普通は自転車置き場などになる場ですが、作家はここを逆に楽しい空間に変えてしまいました。建築上のデットスペースは動物たちや子どもと同じようにアーティストにとってもライブスポットなのです。



6 □袴田京太郎 日本 1963-
Kyotaro Hakamata Japan 1963-
「17才」
「Seventeen」
換気口 vent

袴田京太郎の特色は開口部の不思議な造形です。それはいわば植物の食虫花のもつ一種あぶなげな魅力です。また同時に鉄を使いながら鉄を意識させない面白さがあります。彼の作品にはものをつくりはじめの前の一種の「何にしようかな」というハラハラドキドキするような心のときめきを感じられるのです。



7 □伊藤誠 日本 1955-
Makoto Ito Japan 1955-
換気口 vent



No. 5 を参照して下さい。



11 □スティーヴン・アントナコス
ギリシャ / アメリカ 1926-2013
Stephen Antonakos
Greece / USA 1926-2013
「Ena-1」
パサージューフ・ライティング
canopy light

アントナコスはネオンという線と色をもつ素材を使って都市のなかに朝、昼、夕、夜と違った表情をつくりまします。2才の時にギリシャからアメリカに渡った彼のネオンの作品からはどこかカタコンベ(地下墓地)にかすかに光る灯のようなつつましくもやわらかな表情が伝わってきます。彼のネオンは都会の夜に咲くやさしい花となりました。



12 □トニー・クラッグ イギリス 1949-
Tony Cragg UK 1949-
「セルタイプス、オーガネル、
オーガニズム」
「Cell Types, Organelle
(Cell groups), Organism」
壁面レリーフ
wall relief

クラッグは日常使われているものを、組みかえることでまったく思いもなかった別のものにつくりあげる仕事をしてきました。歯車の積み重ねは美しいバゴタの塔になりました。そのなかに一貫している造形上の特質は、有機的な形を持った開口部をつくることです。今回は作家にとっても新しい仕事で、生命の増殖のエネルギーを表しています。



13 □田中信太郎 日本 1940-
Shintaro Tanaka Japan 1940-
「風の吹く場所」
「A Place Where the Wind Blows」
換気口 vent

田中信太郎はドライエリアの上に鉄とステンレスの線によって飛翔する3つのブロンズ製の球体を浮かせました。これはいつも微妙に揺れていて、それは3つの金属がささやかにふるえる声のように感じられるのです。作家の作品はいつも詩のような、あるいは言葉の発語、発生の期の酸素のような飛翔の瞬間を定着しようとするまなざしによってできています。「風の吹く場所」です。



14 □白井美穂 日本 1962-
Mio Shirai Japan 1962-
車路壁看板
billboard on the parking ramp wall

「階段を降りてくる花嫁」とピカソの絵の前でこちらを「挑発する女性」。さらに「パーベルを持って坂道を登る女性」。これらが2カ所の3枚の看板の内容です。ここに彼女は受け身である現在の女性とそれにあらがおうとする自分自身を映しています。白井美穂は小さなミニチュアをつくり、写真に撮って看板にするという方法を使います。



14 □白井美穂 日本 1962-
Mio Shirai Japan 1962-
車路壁看板
billboard on the parking ramp wall

No. 14 -aを参照して下さい。



15 □白川昌生 日本 1948-
Yoshio Shirakawa Japan 1948-
車路
parking ramp

白川昌生は地下に入る車路を使って仕事をするようになりました。そこで彼は、車路全体の平面図にある形を車路の壁に金属の切り抜きで作り、車路の横にある植栽のなかに立てるという作品をつくりました。建築上すでにできてしまった形をネガとポジでつくるとするのは知的なゲームであり、見る人に発見の喜びを与えます。



16 □モンティエン・ブンマー タイ 1953-2000
Montien Boonma
Thailand 1953-2000
「石鐘の庭」
「Rock Bell Garden」
庭園の社 garden sculpture

タイの作家であるブンマーは独自の文化をもった民族と、その文化の根となる仏教や伝統的な構築物が西洋的な空間と出会う場面の緊張感を作品にしています。彼はおのれの文化と西洋の文化との間で格闘しています。立川の仕事を始める時、彼の奥さんは死の床にありました。この作品が祈りの空間に思えます。



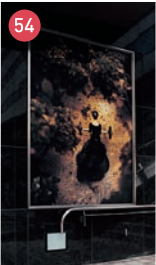
17 □エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardane Spain 1947-2004
「タチカワの女たち」 「Tachikawa Women」
道祖神 guardian deity figure

エステルは窓の外を所在なげに見て、何かを待っている女性をよく描きます。その女性たちが頭に乗せているのは魚や月形のもので、それが何なのか聞いても教えてもらえませんでした。女性たちがいつも待っているだけなのが「同じ女性である彼女には残念なのです。彫刻の形はシンプルですが、確かなデッサンに支えられた姿は美しい。犬は作家の大好きな動物です。



18 □坂口寛敏 日本 1949-
Hirotohi Sakaguchi Japan 1949-
「バーコード・ブリッジ」 「Barcode Bridge」
ベデストリアンデッキ歩道 pedestrian deck

ベデストリアンデッキのブリッジの上に貼ったタイルがバーコードになっていますが、これはももとの建築予算だけでできた作品です。資本主義社会を端的にあらわすバーコード・ブリッジが一番面白いという論理に作家の遊びがあるのです。坂口は平面的な作品を主につくる人ですが逆遠近法の穴をあけたり、道路に写る自分の影の変化を一日中描き続けたりする作家でもあるのです。



54 □白井美穂 日本 1962-
Mio Shirai Japan 1962-
ベデストリアンデッキ看板
billboard on the pedestrian deck

No. 14 -aを参照して下さい。



67 □青木野枝 日本 1958-
Noe Aoki Japan 1958-
換気塔 ventilation tower

鉄は本来硬く構築的な素材ですが、青木野枝はやわらかくて不安定なあやうさをもった鉄の属性を見せようとしてきました。それは現代社会の感覚につながります。例えば不安という感情は鉄にはないし、不安という感情は目には見えませんが、確かな感覚として感じられます。この見えない感覚がつけられた形や色から伝わってくるところに美術の秘密と素晴らしいさがあるのです。この感覚の共有が作家を現代の精神の記録者とするのです。



68 □宮島達男 日本 1957-
Tatsuo Miyajima Japan 1957-
「Luna」
換気塔 ventilation tower

宮島達男は無限に点滅する数字を使う作家で、それは美術が時間と深く結びついていることを教えてくれます。「私の時計は、ばらばらの時間、144個から構成される。それはデジタルな数字で1〜9までカウントし、また1に戻って繰り返す。そして"0"は表記されない。カウントするリズムは1/10秒の速いものもあれば、1時間にひとつしか進まない非常に遅いリズムのものもある。」



69 □マーティン・キッペンベルガー ドイツ 1953-1997
Martin Kippenberger Germany 1953-1997
街灯 streetlamp

彼は美術がどういうものであるべきとか、どんな役割をもつべきだとかいう規範とはまったく別のところで作品をつくろうとしています。彼にとってスタイルとは作家の個性のありかであり、行動と決意によって達成されるものなのです。むしろ彼は人にこう言ってもらいたい。「キッペンベルガーはいい娯楽だったよ」と。これは悪い文明のなかで悪い子になった彼自身にサンタクロースが怒っている作品です。



70 □ジャン・ピエール・レイノー フランス 1939-
Jean-Pierre Raynaud France 1939-
オープン・カフェテラス
open café

レイノーは単純化した物体や環境をつくりまします。彼は以前、四角の白いタイルだけでできた家をつくって、そこに25年住みました。その家は全体が作品であって、その白さを伝えるために家で火を使った調理はせず、食事はいつも外食でした。デパートのオープン・カフェテラス全体を赤い植木鉢と自然石で作った鉢物の庭もそういう考えの延長にあります。



72 □ニキ・ド・サンファル フランス 1930-2002
Niki de Saint Phalle France 1930-2002
「会話」
「The Conversation」
ベンチ bench

ニキは原色を使ったやわらかな形で生命の力をうたいあげる作家です。そこでは女性や花や蛇や唇が、赤、白、青、紫、緑、黄などの色とともに、実に楽しく子どものように、はじけるような充実した動きをするのです。そういえば昔の日本の仏像が、女性のふくよかさを基本にしつつ、指やかいなどのディテールは子どもをモデルにしていたことを思い出します。



74 □山口啓介 日本 1962-
Keisuke Yamaguchi Japan 1962-
「Tachikawa Box」
ベデストリアンデッキ柱脚壁サイン
sign on the wall of pedestrian deck post

山口啓介は銅版画の作家ですが、今回は案内板をつくりました。この案内板は3重になっていて1層目はファーレ立川の現在、2層目は開発前(1989)の街、そして最後の地下層には昔生えていた植物のイラストがこの街の記憶を伝えます。照明も入っていて楽しいものになっています。



71 □ロバート・ラウシェンバーグ アメリカ 1925-2008
Robert Rauschenberg USA 1925-2008
「自転車もとき VI」 「Bicycloid VI」
駐輪場のネオンサイン neon sign for bicycle parking lot

ラウシェンバーグは反アパルトヘイトやエイズをなくすための運動に深くかわり、作品においても社会的な問題を扱ってきました。その材料には、絵の具などと一緒新聞紙のような日常の道具が使われ、彼の作品においては社会と美術が同じ線にあるかのように、今回は普段使っている自転車にネオンをつけて面白くしたものを、駐輪場のサインとして使ったものです。



73 □サンデー・ジャック・アクバン ナイジェリア 1940頃-
Sunday Jack Akpan Nigeria ca.1940-
オブジェ objects

アクバンの村では、村人それぞれがいちばん素晴らしい姿の肖像を注文しに彼のところにやってきます。普通は正装の姿を、サッカー選手ならゴールを蹴った瞬間を頼むのです。それはやがて注文主が死んだ時にお墓に建てられます。そのつくり方がまた面白い。砂で型をつくりコンクリートを流し込み腹と背中を張り合わせその後に着彩するのです。立川ではナイジェリアの首長が勢揃いしています。



75 □植松奎二 日本 1949-
Keiji Uematsu Japan 1949-
「浮くかたち-赤 / 垂」
「Floating Form-Red / Vertical」
オブジェ object

植松奎二は異質な材料の形態とポリウム、線、色を使って空間の安定と崩壊の境目に成立する緊張した作品をつくりだす作家です。ここでは丸い自然石と真っ赤な円錐状の鉄棒と鉄板という4つの要素が力学的にも色彩上でも劇的なコントラストで関係している作品をつくりました。重力や引力、エネルギーといったものは地球という場への興味から来ているような気がします。



77 □市橋太郎 日本 1940-
Taro Ichihashi Japan 1940-
「94・82」
ベデストリアンデッキ支柱
pedestrian deck post

市橋太郎は変形したキャンパスに描く作家です。ここではベデストリアンデッキの連続した円柱のひとつが構造的な理由で不定形になったものを作品にすることになりました。完全さを予測できるものでありながら完全ではありえなかった形の不満があるわけです。しかしその不完全な柱はそれ故にこそひとつの美術的作品になる自由と栄光をもったものといえるのです。



76 □箕原真 日本 1959-
Shin Minozono Japan 1959-
「人の球による空間ゲート」
「Spatial Gate Made of Human Spheres」
車止め bollards

箕原真は建築家です。ここは歩行者専用でありながら、時には緊急車輛が出入りする移動可能な車止めを2カ所で作りました。球体の被膜を立体と壁でつくりながら、その球体を感じさせる装置です。それを作家は球空間による「空間のモデル」と呼んでいます。車中心の都市の機構を人間中心のものへと変えていく契機があるような車止めが登場したのです。